

枕草子日記的章段の情報

山  
本  
利  
達

要 旨

枕草子の日記的章段は五十余段あり、その中には、作者の自讃談とされるものが十余段ある。

草子に書く内容を提案し、それが認められて中宮から下賜された草子に、なぜ自讃談が書かれたのだろうか。

日記的章段には、中宮の人となり、後宮の経営者としての中宮と後宮の有様、中宮の父、兄、弟、妹達の有様を讚美し、そして一条天皇と中宮との仲睦まじさ等が描かれている。日記的章段は中宮とその一族を讚美し、中宮の後宮のすばらしさを伝えようとする方向で書かれているように思われ、自讃談はその背景の一翼を荷なうものと解せられ、他の資料には残らなかつた中宮をめぐる情報を今に伝えることになっている。

(一)

枕草子は三百段程の章段から成っており、その中五十段余りが日記的章段となっている<sup>1)</sup>。その中には、注釈書や論文において、自讃談といわれている章段が約四分の一の十余がある<sup>2)</sup>。

「この草子を、人の見るべきものと思はざりしかば、あやしきことも、にくき事も、ただおもふことを書かむと思ひしなり」(「とり所なきもの」[「一四一段」一九六頁—日本古典文学大系による。以下同じ])といい、跋文でも同様のことをいっているが、草子は中宮から下賜されたものであり、「かやうの事こそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、「一つなおとしそ」といへば、いかがはせん」(「中納言まゐり給ひて」[「二〇二段」一五七頁])とい

うように、同僚の女房達は、草子に書く内容に口をはきんでいる。作者は、中宮や女房の見ることを考慮に入れていたはずである。

「よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由いふも、かたはらいたし」(「かたはらいたきもの」〔九六段〕一四七頁)と述べている同じ草子の中に、十余例もの自讃談があるというのはどう解すべきであろうか。日記的章段には何が書かれているのかを考え、その上で自讃談といわれるものの読み方を考えてみよう。

(二)

「頭の弁の御もとより」(「二三三段」一八五―一八七頁)の話は、頭の弁藤原行成のもとから、餅餠二つを包んで梅の枝につけ、文を添えて届けられたことに端を発している。「進上 餅餠一包 例に依て進上如件 別当 少納言殿 月 日 みまなのなりゆき」と解文の体書き、奥に「こののをこはみづからまあらむとするを、昼はかたちわろしとてまゐらぬなめり」とあり、すばらしい筆蹟だった。中宮に見せると、筆蹟のすばらしさと趣向のおもしろさをほめ、文は中宮の手許に納められた。

返事はどうしたらよいだろう、餅餠を持って来た使者には禄を与えるものなのだろうかと思ひ迷うのを聞いて、中宮は、惟仲がいるだろうから聞くようにと教えた。使者の下僕には禄の不要なことを惟仲から教えられ、「みづから持てまうで来ぬしもべは、いと冷淡なりとなむ見ゆ。如何」と赤い薄様書き、きれいな紅梅につけて返事をする、行成はすぐさまやって来て、「しもべさぶらふ。しもべさぶらふ」というので応対に出ると、「さやうのもの、そらよ

みしておこせ給へると思ひつるに、びびしくもいひたりつるかな。女のすこし我はと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどに、さることいはむ人、かへりて無心ならんかし」といったという。この話の後に次の文がある。三巻本に能因本を対校した『新校本枕草子』（根来司編）で示そう。

則光なりやすなど笑ひてやみにしことを、うへの御せんまへに人々いと多かりけるに、語り申し給ひければ

「……よく言ひたりとなむの給はせし」とまた人の語りし……こそ見苦しきわれぼどもをなつかしかし。

行成が藏人頭になるのは、長徳元年八月であり、権左中弁になるのは翌年の四月なので、この段の話は、長徳元年四月に死去した道隆の没後のことと考えられ、能因本の「殿のまへ」は適当でなく、頭弁行成が帝の前で語ったということになろう。三巻本による注釈書のほとんどが、「これこそ聞きぐるしい自慢話でおもしろい」というように、「また人の語りし」ことを「これこそ」と指して訳してあるが、源氏物語や紫式部日記にある「われぼめ」は、いずれも、自分のことを自分でよしとして人に語るのを傍の者が評した語である。「よく言ひたり」という帝の讃辞を「また人」が語ったことは、作者の「われぼめ」ということにはならず、文脈が辿りにくい。

能因本による『春曙抄』は、「人のほめ給ひし事を此草紙にかく事、見苦しき自讃と也」と「此草紙にかく事」が「われぼめ」だと解しているが、「これこそ……なりかし」において、「これ」は「此草紙にかく事」とはとれない。能因本なら、「人の語りし」で切れ、「これこそ……なりかし」は第三者の批評の言葉という性格をもったものと解され、作者の文とは考えられない。武藤元信『枕草紙通釈』では、「かたりしこそ」で句点をつけ、注では「かたりしこそ（うれしかりしか）」と「こそ」の結びが補ってある。『盤斎抄』に、「人のかたりしとは、女房達などの物語に、只今せらるゝこそ、我心にはしたなくおぼゆるとなり」といつている。「こそ」には、「はしたなかりしか」、あるいは

は「かたはらいたかりしか」の意が籠っているようにも思われるが、「誰がことも、殿上人ほめけりなごきこしめすを、さいはるる人をも、よろこばせ給ふもをかし」(「五月ばかり」[「二三七段」一九二―一九三頁])といっているように、中宮は、女房達が人にほめられるのを喜んだことを思えば、ここは「うれしかりしか」の意が籠っているであろう。「見苦しきわれぼめどもをかし」は、「われぼめども」と複数の「われぼめ」について述べたものであり、この草子に述べた数々の自讃談は「見苦しき」ものであり、「をかし」「笑止だ」(角川文庫)と読者にいいわけをしたものと思われる。

数々の自讃談を「見苦しき」といい、「をかし」というのは、「一種のてれ隠し」だろうと久保木氏はいつていられるが、このような断りをしながらも、この話を語ったのは、「われぼめ」をするのが目的ではなく、この話をめぐる中宮定子の後宮のさまを伝えようとしたのではなかつたろうか。行成から送られた餅餠と書状をまず中宮に見せたところ、その書状を「めでたくも書きたるかな」と手許に納めたことは見逃せない。「頭の弁の職にまゐり給ひて」(「二二六段」)においても、行成から作者への文三通の中、一通は中宮の弟隆円僧都が請い受け、あとの二通は中宮の手許に納められている。筆蹟のよしあしを見極める目、よき物を手許で楽しもうとするすぐれた芸術的感覚の持主だったことが、これによって伝えられている。

「頭の中将すずるなるそら言を」(「八二段」一一五―一九頁)では、頭の中将齊信から「蘭省花時錦帳下」と書き、「末はいかに、いかに」という文が作者に届けられた。そこで、「御前おはしまさば、御覧せきすべきを」(「一六頁」といっている。「二月つごもり頃に」(「二〇六段」一六五―一六六頁)では、宰相公任から作者へ、「すこし春あるここにこそすれ」と懐紙に書いて来た。それは「げにけふのけしきにようあひたる」句だった。この本をどう

つけたらよかろうかと思ひあぐねた。「御前に御覽せさせんとすれど、上のおはしましておほとのごもりたり」といつている。どちらの返答も賞讃されたと自讃談となるのだが、斉信や公任への返事を、作者一人でしようとせず、中宮に相談し、教えを受けようとしている。前述の行成への返答も中宮の教えに導かれたものであつた。

斉信への返しには、「草のいほりをたれかたづねん」と答え、斉信の宿直所にいた人々の絶讃を受けることになつたが、自讃談に終っていない。

物語などしてゐたる程に、「まづ」と召したれば、まゐりたるに、此のことおほせられんとなりけり。上わたらせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのこともみな、扇に書きつけてなむ持たる、など仰せらるるにこそ、あさましく、何のいはせけるにかとおぼえしか。(一一九頁)

斉信の宿直所で賞讃をえた話が、帝や中宮の耳に達し、作者が召され、楽しい話題となつたのである。帝と中宮の好ましい日常を伝えることになつている。

「職の御曹司におはします頃、西の廊にて」(「八七段」一二六―一二六頁)は、雪山の存在期間を中宮が話題にし、作者が言い当てて、雪に歌を添えて誇ろうと意気込んでいたところ、中宮の配慮で雪が取り除かれ、作者の口惜しがつた話であるが、次のように結ばれている。

(宮)「かう心に入れて思ひたることをたがへたれば、罪得らん。(中略)上もきこしめして、「いと思ひやりふかくあらがひたる」など、殿上人どもに仰せられけり。さても、その歌語れ。いまかくいひあらはしつれば、おなじごと勝ちたるなり」など、御前にも仰せられ、人々ものたまへど、「なでふにか、さばかり憂きことを聞きながら、啓し侍らん」など、まことにまめやかにうんじ、心憂がれば、上もわたらせ給ひて、「まことに、年頃は、おぼす

人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」など仰せらるるに、いとど憂く、つらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いで、あはれ、いみじく憂き世ぞかし。のちに降り積みて侍りし雪を、うれしく思ひ侍りしに、「それはあいなし、かき棄てよ」と仰せごと侍りしか」と申せば、「勝たせじとおぼしけるななり」と、上もわらはせ給ふ。(一三五―一三六頁)

中宮の周辺での話題が帝に伝わり、帝もその話に加わり、中宮や女房達と会話を楽しんだことがわかる。

「円融院の御はての年」〔一三八段〕一九三―一九五頁〕は、帝と中宮が一緒にあって、法師の手の立文にし、差出人を隠して、帝の乳母藤三位に送り、乳母がかつがれ、関係者が笑う話である。これは作者の宮仕え以前の話で、作者は聞いた話であるはずなのに、帝と中宮が楽しむ場にいたように書いている。作者が日記的章段で書き伝えたかったものの方向が伺えるように思う。

(三)

長徳二年(九九六)正月十六日、伊周、隆家の従者が花山院を射ることがあった。二月二十五日に中宮は職御曹司に移り(信長記)、三月四日には二条北宮に移った。四月二十四日、花山院を射させたこと、東三条院を呪詛したと等により、伊周は太宰権帥に、隆家は出雲権守に配流となった。

五月一日、伊周と隆家は中宮御所に入り出なかつたので、中宮を中宮権大夫扶義の車に移し、檢非違使は中宮の夜大殿を壊し、板敷を放つまでして搜した。隆家は出たが伊周は逃亡した。中宮は大恥を受け出家した。

六月九日、中宮御所が焼亡し、中宮は明順宅に移った（枕草子勅物）。その後、中宮は小二条殿に移り（枕草子四三段）、十二月十六日、第一皇女脩子を生んだ。

翌年（九九七）三月二十五日、東三条院御脳により大赦があり、四月五日、伊周と隆家の罪科が赦された。六月十二日、天皇は東三条院を見舞い、その夜、中宮は職御曹司に入った。その後、長保元年（九九九）八月九日、中宮は平生昌第に移るが（以上につき依拠資料を示さない部分は、小右記、日本紀略による）、それまでは職御曹司にいたものと思われる<sup>3</sup>。

「職の御曹司におはします頃、西の廂にて」「八七段」は「雪山の段」といわれるもので、長徳四年十二月から長保元年一月にかけてのものである。十二月余日に降った雪を、中宮は職御曹司の庭に山に作らせ、その存在期間を女房達に答えさせたところ、作者は正月の十余日までと答えたが、その他の答えは年内であった。年を越えても雪山は残っていた。作者は勝った気持から十五日まで残ることを念じたが、女房達は七日まではもつまいと言ひ、勝敗を決しようとする意識が高まった。そんな折柄、「にはかに内裏へ、三日に入らせ給ふべし。いみじうくちをし」（二二頁）と述べている。中宮は正月三日に急に宮中に入ることになったのである。「勅物」〔図書寮本〕「校本枕冊子」による）には、「入内事無所見、若密儀敷、七日中納言実資卿叙正三位、拜賀参式御曹司、已無人令啓直罷出、外人猶存御式御曹司之由敷」とある。中宮の参内は人知れぬことだったらしい。「にはかに」は公的にも女房達にも触れがなかったことを思わせ、「べし」という推量も内々のことであつたことによる。

長徳三年六月二十五日に、中宮が職御曹司に入ったことについて、「小右紀」は、「今夜中宮参給職<sup>曹</sup>宮司、天下不甘心、彼宮人々称不出家給云々、太希有事也、外記令申可属従行啓之由、然而不候、行啓事戸部承行」と述べている。



中宮の出家は、「宮は御缺して御手づから尼にならせ給ひぬ」（栄花物語「浦々の別」）というように、自ら髪を切るだけで正式なものではなかったのであろう。「宮人々」は「不出家給」と称して、中宮が職御曹司に入ることに対する「天下」の批判に答えていた。そういう事情があつて、帝は中宮を密かに呼んだのであろう。

一月七日に藤原実資が叙位の慶び申しに職御曹司へ行つたところ、中宮は不在だったということは、中宮の参内が公的にしられていなかったことを示すことになる。

「にはかに内裏へ、三日入らせ給ふべし」という記事は、中宮の参内を伝える唯一のものであり、それが密かなことであつたことをいうとともに、一条帝の中宮への愛の深さを伝えることになっている。

この年の十一月七日に第一皇子が誕生するが、それは密々の参内がその後も重ねられたことを想像させる。

#### (四)

大納言のまゐり給へるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪にはえていみじうをかし。柱もとにゐ給ひて、「昨日今日、物忌に侍りつれど、雪のいたくふり侍りつれば、おぼつかなきになん」と申し給ふ。「道もなしと思ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。うちわらひ給ひて、「あはれともや御覽するとて」などのたまふ、御ありさまども、これよりはなにごとかはまさらん。物語にいみじう口にまかせていひたるにたがはざめりとおぼゆ。（宮に始めてまゐりたるころ）「一八四段」二二二頁

兼盛の「山里は雪降りつみて道もなし今日来む人をあはれとは見む」（拾遺集、二五二）を踏まえた、中宮と伊周の

挨拶に、出仕したばかりの作者は感じ入っている。歌を踏まえた会話を楽しむ兄妹だったのである。

道隆の没後、伊周や隆家が流罪となり、中宮は自ら髪を切るということになった。その頃、作者は道長方の人と関係があるときさやかれ、女房達から白眼視され、里に籠った。そこへ中宮の出仕をうながす文が届けられた。それは、「山吹の花びらただ一重をつつませ給へり。それに、「いはで思ふぞ」と書かせ給へる」(「殿などのおはしまさで後」「一四三段」二〇一頁)というものであった。山吹の花びら一重は、「わがやどの八重山吹は一重だに散り残らん春のかたみに」(拾遺集、七二)によって、私の許から去らずにいてほしいという心を伝えようとしたのであり、「いはで思ふぞ」は、「こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」(古今六帖五「いはでおもふ」二六四八)によって、しきりに待っていることをいったものであった。中宮は、このように会話や手紙に歌を有効に用いることを好む人だった。

「円融院の御時に、「草子に歌ひとつ書け」と、殿上人におほせられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、「さらにただ、手のあしきよき、歌のをりにあはざらんも知らじ」とおほせらるれば、わびてみな書きける中に、ただいまの関白殿、三位の中將ときこえける時、

しほのみついつもの浦のいつもいつも君をばふかく思ふはやわが

といふ歌のすゑを、「たのむはやわが」と書き給へりけるをなんいみじうめでさせ給ひける」(清涼殿の丑寅のすみの「二三段」六〇一―六一頁)

これは、中宮の父道隆の若い時、円融院にほめられた話で、中宮が女房達に語ったものである。人の歌の語句を少し変えることによって心情をうまく一首にした道隆の才能を示している。中宮は、父のこの逸話を好ましいものと思っ

ていて、女房達にこの話をする前に、円融院と同様の課題を与えた。

白き色紙おしたたみて、「これに、ただいまおぼえんふるきことひとつつ書け」と仰せらるる、(伊周が)外にゐたまへるに、「これはいかが」と申せば、「とう書きてまゐらせ給へ。男は言くはへさぶらふべきにもあらず」とてさしいれ給へり。御硯とりおろして、「とくとく、ただ思ひまはさで、難波津もなにも、ふとおぼえんことを」と責めさせ給ふに、などさは憶せしにか、すべて、おもてさへあかみてぞ思ひみだるるや。

春の歌、花の心など、さいふいふも、上臈ふたつみつばかり書きて、「これに」とあるに、

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をしみればもの思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じくらべて、「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」とおほせらるる、(六〇頁)

「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」という中宮の言葉だけに目をとめれば自讃談ということになるが、桜の折柄、清涼殿での帝、中宮、伊周のすばらしい様を書きとめる一環として書かれたものであり、中宮の好みのありかが女房達に伝えられ、教えられる話だということになろう。

(五)

上の御前の、柱に寄りかからせ給ひて、すこし眠らせ給ふを、「かれ、見たてまつらせ給へ。いまは明けぬるに、かうおほとのごもるべきかは」と申させ給へば、「げに」など、宮の御前にもわらひきこえさせ給ふも、知らせ給

はぬほどに、長女が童の、にはとりを捕へ持て来て、「あしたに里へ持て行かん」といひて隠し置きたりける、い  
 かがしけん、犬見つけて追ひければ、廊のまきに逃げ入りて、おそろしう鳴きののしるに、みな人起きなどしぬな  
 り。上もうちおどろかせ給ひて、「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせ給ふに、大納言殿の、「声明王の眠りを驚  
 かす」といふことを、高ううち出し給へる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになりぬ。  
 「いみじきをりのことかな」と、上も宮も興せさせ給ふ。(「大納言殿まゐり給ひて」三二三段 三一九頁)

伊周が帝に漢籍を講じていたところ、夜が更け、御前の人も次第に下り、帝も柱に寄りかかつて眠っている中に丑四  
 つと時がつげられた。伊周は、もう夜明けなのにあんなに眠っているのだらうかと中宮にいう。折から鶏が犬に追わ  
 れて大声で鳴き、帝は目をさまし、「いかでありつる鶏ぞ」というと、伊周は、「鶏人曉 唱声驚 明王之眠」という  
 和漢朗詠集にある都良香の句を誦した。帝は「いみじきをりのことかな」と、この折にかなった詩句の朗誦に感じ入  
 り、中宮も同感し、作者はこの場のさまを「めでたけれ」と思っている。伊周の漢籍の学力、折にかなった詩句を誦  
 する風流、それに感心する帝と中宮が描き出され、その場のすばらしさに作者は打たれている。

伊周の漢籍の学力は、母親ゆずりなのである。母貴子の漢籍の学識については『大鏡』に伝えられている。中宮  
 も漢籍の教養をもち、それを踏まえた会話を楽しんだことを日記的章段は伝えている。

正暦五年二月二十一日、積善寺で一切経供養が行われた。中宮も参詣すべく予め二月一日頃に二条の宮に退出した。  
 その時のことである。

さて、八九日のほどにまかづるを、「いますこし近うなりてを」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう、つねよ  
 りものどかに照りたる昼つかた、「花の心開けざるや。いかに、いかに」とのたまはせられたれば、「秋はまだしく待れ

ど、夜に九度のぼる心地なんし侍る」と聞えさせつ。(「関白殿、二月廿一日に」二七八段)二九〇頁)

里下りした作者への中宮から来た手紙は、「九月西風興、月冷露華凝。思君秋夜長、一夜魂九升。二月東風来、草柝花心開。思君春日遲、一日腸九廻」という白楽天の「長相思」の「花心開」の詩句を踏まえての心を籠めたものであった。作者は、「九月西風興」を考慮し「秋はまだしく侍れど」といい、「一夜魂九升」を用いて答えている。

中宮が上の御局にいた時のことである。殿上人が御簾の前で琴や笛を一日演奏しくらし、まだ格子を下さないのに大殿油がともされたので、室内が透けて見えた。中宮は、紅の美しい桂や、つやを出した打衣を重ね、黒々と光沢の出た琵琶に袖をかけて立てて持っていた。それだけでもすばらしいのに、その手許から額のあたりが大層白くくつきりと見え、そのすばらしさはたとえようもなかった。作者は、「なかば隠したりけんは、えかくはあらざりけんかし。あれはただ人にこそありけめ」と、白楽天の「琵琶行」の「猶抱琵琶半遮面」を踏まえて傍の女房にいうと、狭いのに人をかきわけて中宮にそれを伝えた。すると、中宮は笑って、「別れは知りたりや」といったと作者に伝えたという。(「上の御局の御簾の前にて」「九四段」一四四〜一四五頁)。中宮は「琵琶行」の「醉不成飲慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶声。主人忘帰客不発」の「慘將別」によったのであろう。中宮は女房達との對話に、詩句を踏まえるのを楽しんでいたことがしられる。

次の文は、頭中将齊信が中宮の職の御曹司に訪れた時のことで、その場に居合わせなかった作者の、女房達から聞いた話である。

「西の京といふ所のあはれなりつる事、もろともに見る人のあらましかばとなんおぼえつる。垣などもみな古りて、若生ひてなん」など語りつれば、宰相の君、「瓦に松はありつや」といらへたるに、いみじうめでて、「西の方、都

門を去れる事いくばくの地ぞ」と口ずさびつる事など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。(「かへる年  
の二月廿日よ日」〔八三段〕一一二一一―一三三頁。テキストの符号を変更したところがある)

宰相の君の「瓦に松はありつや」は、白楽天の「驪宮高」の「翠華不<sub>レ</sub>来歳月久、墙有<sub>レ</sub>衣兮瓦有<sub>レ</sub>松」によつたものであり、それに答えて誦した詩句は、「驪宮高」の右に続く「吾君在位已<sub>レ</sub>五載、何不<sub>レ</sub>一幸乎其中。西去<sub>レ</sub>都門<sub>レ</sub>幾多地」によつてゐる。日記的章段には、作者が漢籍の素養によつて男性貴族の讚辞を得たことがいくつも出ているが、中宮の女房の一人、宰相の君は、右のように漢詩を踏まえて斉信と応対している。作者のみが漢詩文の素養をもつて男性貴族と対話できたのではなかった。中宮をはじめ、女房達も漢詩文の素養があつて、日常会話の中に活かしていたことがわかる。こういう会話が楽しめる所だったからこそ、男性貴族が多く訪れ、中宮の後宮は活気をもつことができたのであつた。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ。

人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、此の宮の人には、さべきなめり」といふ。(「雪のいと高う降りたるを」〔二九九段〕三二〇―三二二頁)

自讃談の一つとして有名なものであるが、作者のとつた行動は、中宮の「少納言よ」との呼びかけと、「高爐峯の雪いかならん」という問いに導かれたものであつた。他の女房達も「高爐峯雪探<sub>レ</sub>簾看<sub>レ</sub>」という詩は知っており、日頃歌いもしているという。詩句の通りなら、寝そべつたまま簾の裾を持ち上げることになる。中宮の目に入れるために格子を上げさせ、簾を高く巻き上げたところに、原詩を換骨奪胎させる機転が中宮を満足させ、女房達は、この中宮

の経営する後宮にふさわしい人物だと、中宮の好みを理解し合つたのである。話は自讃のようであるが、後宮を経営するリーダーとしての中宮のありようを伝えることになっている。

中宮の好みによく答えることのできた作者は、女房達の中で中宮の愛を多く受けることになった。積善寺供養の時、中宮の近くの上席に、上臈の女房中納言の君と宰相の君がいたが、中宮は「宰相はあなたに行きて、人どものゐるところにて見よ」(二一九七頁)という、宰相の君は中宮の心を察知して、「ここにて、三人はいとよく見侍りぬべし」といい、「さば、入れ」といつて作者が召し上げられた。女房達は「殿上ゆるさる内舍人なめり」と笑つたが、「面立たしいことであつた。そして、「かかることなどぞみづからいふは、吹き語りなどにもあり、また、君の御ためにも軽々しう、かばかりの人をさおぼしけんなど、おのづから、もの知り、世の中もどきなどする人は、あいなうぞ、かしこき御ことにかかりてかたじけなけれど、あることはまたいかかは。まことに身のほどに過ぎたることどももありぬべし」(二一九七―一九八頁)と、特別の愛顧を「みづからいふは吹き語り」になり、中宮が軽々しいと非難されては勿体ないけれど、事実はいわずにすまされないといつている。中宮は、作者のような人物を好み愛した人だつたことを読者は知ることになろう。

「小白河といふ所は」(三五段)七六―八一頁)は、寛和二年六月の話で、作者の出仕以前のことを述べている。次の文は権大納言右大将濟時の家で法華八講があり、作者も参列していたが、用事のため、朝講が終わると退出した時のことである。

朝講はてなば、なほいかで出でなむと、まへなる車どもに消息すれば、ちかくたたむがうれしさにや、「はやはや」と引きいであけていだすを見給ひて、いとかしがましきまで、老上達部さへわらひにくむをも、ききいれず、いら

へもせで、しひてせばがりいづれば、権中納言の、「やや、まかりぬるもよし」とて、うち系み給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、あつきにまどはしいでて、人して、「五千人のうちには入らせ給はぬやうあらじ」と聞えかけてかへりにき。(八〇頁)

権中納言義懐と作者の応対は、釈迦が開三頭一の法を説こうとした時、五千人の増上慢が座を起って退いたが、釈迦は黙然として制止せず、舍利弗に向つて、「如是増上慢人、退亦佳矣」といったという法華經の方便品の故事によつてゐる。作者の応答が後に人に伝えられ、故事を踏まえた応対ができる才が買われて、宮仕えの話が進められたのではなからうか。作者が始めて出仕した頃、恥かしがる作者の側へ伊周が来て、「まだまるらざりしより聞きおき給ひけることなど、「まことにや、さありし」などのたまふに」(「宮にはじめてまるりたるころ」〔二八四段〕一三二二頁)とある。この出仕以前の話の中に、右の義懐と作者との応答のことがあつたにちがいない。出仕以前の作者に関わるこの話が、日記的章段に書かれた意義はそこにあるのだろう。

## (六)

中宮の父道隆は、猿楽言を樂しむ人であつたことが、「淑景舎、東宮にまるり給ふほどのことなど」〔二〇四段〕や、「関白殿、二月廿一日に」〔二七八段〕に見られる。「中納言まるり給ひて」〔二〇二段〕では、中宮の弟隆家の猿楽言、「宮にはじめてまるりたるころ」〔二八四段〕では中宮の兄伊周の猿楽言が見られる。このように親子揃つて猿楽言を樂しむ人達で、中宮もまた猿楽言を樂しむ人であつたことが日記的章段の中でしられる。



無名といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせ給へる、みなどしてかき鳴らしなどする、といへば、弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかに」とかきこえさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおぼえしか。

淑景舎などわたり給ひて、御物語のついでに、「まろがもとに、いとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へりし」とのたまふを、僧都の君、「それは隆円に賜へ。おのがもとにめでたき琴きん侍り。それに代へさせ給へ」と申し給ふを、聞きも入れ給はで、こと事をのたまふに、いらへさせ奉らんと、あまたたびきこえ給ふに、なほものものたまはねば、宮の御前の、「いなかへじと思おぼいたるものを」とのたまはせたる、御けしきのいみじうをかきことぞかぎりなき。

この御笛の名を、僧都の君もえ知り給はざりければ、ただうらめしとぞ思いためる。これは、職の御曹司におはしましし程の事なめり。上の御前に、「いなかへじ」といふ御笛のさぶらふなり。「無名といふ琵琶の御琴を」「九三段」一四三―一四四頁

無名という名の帝の琵琶の名を作者が聞くと、中宮は「ただいとはかなく、名もなし」と教えたり、淑景舎の笙の笛と隆円たかひらの琴との交換を度々隆円が願つても淑景舎が耳をかさずにいると、中宮は「いなかへじ」と思つていられるのだから駄目だと言っている。帝の琵琶や笛の名を用いた猿楽言である。

中宮の「我をば思ふや」との問いに、作者が「いかがは」と答えたのと同時に、台盤所で大きくしゃみをしたので、中宮は「あな、心憂。そら言をいふなりけり。よし、よし」と作者を口惜しがらせ、翌朝には「いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば」という歌を伝えさせている。「宮にはじめてまゐりたるころ」

〔一八四段〕一三三―一三四頁。くしゃみを種に猿楽言で作者との対話を楽しんだという話である。

細殿から不都合な人が暁にかさをさして帰って行ったと女房達が言い出した。それは作者の許に泊まった男のことであつた。中宮から、「大がさの絵をかきて、人は見えず、ただ手のかぎり笠をとらへさせて、下に、山の端明けしあしたより」という文が来て、すぐに返事をといわれた。〔二三八段〕二六二頁。絵により歌の第一句の「三笠山」を示したもので絵も句も、猿楽言を楽しむ中宮の日常の一齣といえよう。

(七)

古今集を中宮の手許において、歌の本の句をいって、その末の句を女房達に問うている。宰相の君が十程答え、他はそれ以下というなさけないありさまであつた。そこで中宮は、村上天皇が古今集をひろげて、「その月、なにのをり、その人のよみたる歌はいかに」と宣耀殿の女御に問うたところ、二十巻の歌すべてを答えたという逸話を語っている。〔清涼殿の丑寅のすみの〕一三三殿一六一―一六二頁。女房達の教養についての中宮の理想を示したことになる。

作者が仲間の女房達と、賀茂の奥へ時鳥を聞きに行った時のことである。中宮は、詠んだ歌を尋ねたところ、一首も作れなかつたことを聞き、「くちをしのことや。上人などの聞かんに、いかでか、つゆをかしきことなくてはあらん。その聞きつらん所にて、きとこそはよまましか。あまりぎしきさだめつらんこそあやしけれ。ここにてもよめ。いといふかひなし。」「五月の御精進のほど」〔九九段〕一五二頁と歌を詠む心得をいい、あくまで歌を求めている。

女房に対する指導ぶりがしられる。

中宮が五節を出した時、中宮は、参加者の人選やその衣裳を自ら計画し、五節局での心得を教える人であった。  
〔宮の五節いださせ給ふに〕〔九〇段〕一三九―一四一頁〕。

中宮は自分の衣裳には、自分の好みを生かそうとした。妹の東宮妃の淑景舎と対面したのは二月十余日であった。  
〔紅梅の固紋・浮紋の御衣ども、くれなるのうちたる、御衣三重が上にただひき重ねて〕、「紅梅には濃き衣こそをか  
しけれ。え着ぬこそくちをしけれ。いまは、紅梅は着でもありぬべしかし。されど、萌黄などのにくければ。くれな  
るにあはぬか」といったが、すばらしかった。紅の衣裳を好み、それが似合う人だった。〔淑景舎、東宮にまゐり給  
ふほどのことなど〕〔一〇四段〕一六〇頁〕。

二月廿一日に行われた積善寺供養の日にも、「まだ御裳・唐の御衣にたてまつりながらおはしますぞいみじき。く  
れなるの御衣どもよろしからんやは。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重がさねの織物に赤色の唐の御衣、地摺の唐  
の薄物に、象眼重ねたる御裳などたてまつりて、ものの色などは、さらになべてのに似るべきやうもなし」〔関白殿、  
二月廿一日に〕〔二七八段〕二九六頁〕、ここでも紅の衣裳がほめられている。

中宮は、季節によって、自らの衣裳の色合に心を配るすぐれた色感の持主だった。五節の衣裳を計画したり、自ら  
の衣裳を選び示すことによって女房達に手本を示した人だった。

(八)

中宮が職の御曹司にいた頃、西の廊で不断の御読経が行われ、御仏供のお下りを女法師がもらいに来た。女房達はこちらから、下品な歌や舞を演じさせた。中宮は、どうして「かたはらいたきわざ」をさせたのかとたしなめ、「その衣ひとつとらせて、とく遣りてよ」と、女法師へのあわれみをかけている。(職の御曹司におはします頃、西の廂にて)「八七段」一二七―一二八頁)。

中宮の弟隆円の乳母が、中宮の妹の御匣殿の局にいて、そこへ作者が行合せていた時のことである。馬寮の秣の積んである家から火が出て、類焼の難にあい、家財一切を失ったと歎く男が慈悲を求めてやって来た。

「あからさまなものにまかりたりしほどに、侍る所の焼け侍りにければ、がうなのやうに、人の家に尻をさし入れてのみさぶらふ。馬づかさの御秣積みて侍りける家より出でまうで来て侍るなり。ただ垣を隔てて侍れば、夜殿に寝て侍りけるわらはべも、ほとほと焼けぬべくてなん。いささかもとどうで侍らず」(僧都の御乳母のままなど)「三二四段」三三〇頁)

と男は話した。笑いをさそう男の話しぶりからであろう。御匣殿も笑った。作者はふざけた歌を短冊に書いて「これをとらせ給へ」と投げ与えると、女房達も笑って、「このおはする人の、家焼けたなりとて、いとほしがりて賜ふなり」といつて与えた。

「これは、なにの御短冊にか侍らん。物いくらはかりにか」といへば、「ただ読めかし」といふ。「いかでか。片目もあきつかうまつらでは」といへば、「人にも見せよ。ただいま百せば、とみにて上へまるぞ。さばかりめで

たき物を得ては、なにをか思ふ」(三二二頁)

と、笑いこけて中宮御前に参上した。乳母は、中宮に経緯を話し、「里に行きていかに腹立たんなど」というと、また笑った。中宮は「など、かく物狂ほしからん」と笑ったという。

男の物言いは、女房達の笑いをさそつたにしても、また中宮も笑いにさそわれはしたが、慈悲を求めて来た男に対して、ふざけて笑うばかりの女房達に、「など、かく物狂ほしからん」とたしなめたのだつた。

以上見てきたように、日記的章段では、中宮一族のすばらしさ、一条天皇と中宮との仲睦まじさ、中宮の人となりや、中宮の作者への愛、後宮に訪れる男性貴族のさま等を知ることができた。自讃談といわれるものも、中宮の後宮のありさまを伝えるものとしての役目をもっていた。

積善寺供養の記事の末尾で、

されど、そのをり、めでたしと見たてまつりし御ことどもも、今の世の御ことどもに見たてまつりくらぶるに、すべてひとつに申すべきにもあらねば、もの憂くて、多かりしことどもも、みなとどめつ。(関白殿、二月廿一日に「

二七八段」三〇〇頁)

とはいつているが、中宮をはじめ道隆、伊周、その一族のすばらしさ、華やかさが讚美の目をもって日記的章段に描かれている。もし、枕草子なかりせば、わけても、日記的章段が書かれていなかったら、中宮定子やその後宮についてどれだけのことを知ることができようか。

注

(1) 日本古典文学大系は三一八段、新潮日本古典集成、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集では二九八段、角川文庫、和泉古典叢書では三〇一段になっており、日記的章段は五六段ある。

(2) 久保木哲夫氏の「枕草子における自讃談―その表現の方法」(言語と文芸第七〇号、昭四五)においては十三章段をあげていられる。

(3) 「権記」長徳四年(九九八)十一月十六日の記事中に「次参院、此間左府参中宮給云々、仍亦参職御曹司、(中宮御在所、)次参内。」とあることから推定。

**Information of the diary-style articles  
in Makuranososhi.**

Ritatsu YAMAMOTO